

# 関野貞博士と古瓦

—— 東大・関野日本瓦コレクションの考察 ——

山之内 誠

## 一 はじめに

関野貞博士（一八六七—一九三五）が明治から昭和初期にかけて建築史、美術史、考古学の分野で幅広く活躍されたことは周知のとおりである。なかでも法隆寺論争において、非再建論の主唱者の立場から建築様式の緻密な編年を押し進めたことは、建築史学に大いなる発展をもたらした。建築史学史上の意義も極めて大きい。関野博士の功績は、これら複数の学問分野の草創期において、とりわけ様式史的な研究に先鞭をつけたことにあるとも考えられよう。

古瓦は、ほとんどが埋蔵文化財として出土するものである関係上、その編年は主に考古学者の手により研究されてきたが、先鞭をつけたのはやはり関野博士であった。後に述べるように、関野博士は技師として奈良県に赴任していた間に古瓦の蒐集・研究を開始したが、それまで好事家の蒐集の対象でしかなかった古瓦をほとんど初めて歴史資料として研究対象としたのだった。その成果は『考古

学講座 瓦』（雄山閣出版、一九二八年）として集大成されている。<sup>1</sup>

さて、関野博士はこうした研究活動のためあるいは教育のために、数多くの古瓦を蒐集し、そのうち日本の瓦については三九七点が現在も東京大学大学院工学系研究科建築学専攻に伝えられているのだが、<sup>2</sup> 偶々過日行われた工学部一号館の改修作業の際に、これらの調査・整理を行う機会を得た。この調査の結果、年代的には七世紀から明治時代に至るまでの幅広い時代のものが含まれ、そのうち八世紀以前のものが大半を占めていることや、著名な建築の瓦が多数含まれていることなどが判明している。それに加え、関野博士の経歴・業績との密接な関係や、人間関係あるいは人柄までもが反映されていることがわかってきた。したがって本稿では、このコレクションの貴重性に鑑み、これらの古瓦と関野博士の事績との関わりを考察していくなかで、関野日本瓦コレクションのもつ性格を明らかにしていこうと思う。もとよりコレクションすべての紹介は不可能な話であり、とても全貌を正確に伝えることは叶わぬが、瓦研究の

スタート時の様子や関野博士の人物像を、少しでも具体的に描き出せば幸いである。

## 二 関野日本瓦コレクションの概要

### 蒐集の時期

東京大学建築史研究室に残されていた、旧備品台帳である物品監守簿（以下、単に「物品監守簿」と呼ぶ）によると、東大による古瓦の蒐集は明治三十八年十月十二日の関野博士からの寄贈に始まる。そのとき寄贈された日本の古瓦は一九二点に上るが、物品監守簿に記された日本の古瓦は全部で三九八点であるから、全体の約半数が当初から存在したことになる。その後、様々な購入や人物からの寄贈を断続的に繰り返し、昭和十一年二月十五日までの約三〇年間、蒐集は続いている。

この最後の寄贈となったのは伏見城の瓦四点で、今回の調査でも確認できているが、実は関野博士はこの少し前の昭和十年七月二十九日に既に逝去している。したがって、これも含めて関野コレクションと呼ぶのが適切か否かは問題のあるところだが、しかしながら亡くなられてからあまり時を隔てずに寄贈されていることと、これ以後、東京大学建築学科の瓦蒐集は今日に至るまで一切行われていないこと、また、関野博士が同型式の伏見城の瓦を「考古学講座『瓦』」に紹介していることなどを勘案すると、関野博士の死を悼んで関係者から寄贈されたものの可能性が充分に考えられる。少なくとも、古瓦研究者の第一人者たる関野博士の存在を意識して東大へ寄

贈されたことは確実であろう。したがって、本稿ではこれらも含めて全体を、仮に「関野日本瓦コレクション」と呼ぶことにする。

### 時代別の内訳

現在、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻の管理下にある日本の古瓦は、今回整理を行った三九七点である。これらを時代別に分類すると、

|                |      |
|----------------|------|
| 七世紀に属するもの      | 五七点  |
| 八世紀に属するもの      | 一五八点 |
| 九〜一二世紀に属するもの   | 四六六  |
| 一三〜四世紀に属するもの   | 五〇点  |
| 一五〜六世紀に属するもの   | 一六六  |
| 一七世紀〜江戸末に属するもの | 三二点  |
| 明治時代に属するもの（洋瓦） | 一二点  |
| 時代不明           | 二六六  |
| その他（模型）        | 一点   |

このように時代別にみると、半数以上が七、八世紀に属するものがあり、圧倒的に多い。これらは総て寺院あるいは宮殿の瓦である。それに対し、一五〜六世紀の瓦のうちの五五と、一七世紀〜江戸末の瓦のうち十一は姫路城の瓦であり、また湯島聖堂の瓦（江戸時代）が一二点もあるなど、特に近世以降のコレクションは特定の建築の瓦が多数存在する傾向がある。変わったところでは、明治時代に日本で焼かれた洋風瓦や、関野博士が作らせたと思われる新業師

寺本堂の鬼瓦があるが、これについては後述することにする。

地域別に見ると、一見して特徴的なのは、奈良で出土したものが大半を占めることである。七、八世紀に属するものが多いので当然なのだが、それ以外でも鎌倉時代に属するものほとんど総てが南都復興期の奈良の寺院の瓦である。これは関野博士が奈良県に技師として赴任していたことや、古社寺の保存事業が奈良から始められたことを考えれば、当然のことであろう。

### 瓦の散逸について

現在残されている瓦の内訳は前項に示したとおりだが、物品監守簿には日本の瓦は三九八点記されており、掲載されていない洋風瓦も合わせると合計四一〇点となる。したがって、差し引き一三点が散逸してしまったことがわかる。このことについては、太田博太郎先生から詳しく経緯を伺うことができた。関野日本瓦コレクションが散逸したのは、戦後すぐにGHQが東大を接収しようとしたときのこと、次の日に進駐軍が来るという連絡があったのを受けて、これらの瓦を土に埋めたり、本郷通り沿いに知人がいる人たちに預けに行かせたことがあったようだ。瓦のようなものは書物などとは異なり、どのような扱いを受けるか予測できなかったことが運び出した理由である。朝鮮・中国の瓦は（全部ではないが）戦時中から疎開させていたので問題なかったが、残る日本の瓦などは現在と同様に廊下の棚に入ってしまったので、とにかく急な連絡だったので、台帳に書き留める暇もなく近所に預けに行かざるを得なかった

とのことである。したがって十分な管理ができなかったため、結果的に返却されなかったものがいくつあったのだそう。後日、太田先生は骨董屋にそれらしきものが並んでいるのを目撃したそうだが、東大の所有物たる証拠もないので取り返せなかったとのことである。戦後の混乱の一端が垣間見えて、なかなか興味深いエピソードである。

### 瓦の入手経路について

関野日本瓦コレクションの入手経路については不明点が少なくないが、大きく分けて次の三通りに分類できようである。

- ① 関野博士自身が現地で取得したもの
- ② 寺社や知人から譲り受けたもの
- ③ 道具屋等から買い入れたもの

いずれもその正確な数はわからないが、関野博士が著作中で紹介した情報や、瓦に直接記録された情報により、いくつものものについては入手経路が確認できる。現在残っている瓦の中で確実に把握できたのは、①が一六点、②が五五点、③が一九点である。

①について確認できた一六点というのは、関野博士が著作中で「・・・此の瓦は先年余が親しく採集せしものにして・・・」などと紹介しているもので、実際にはこの他にも存在するであろう。関野博士は明治二十九年（一八九六）から明治三十四年にかけて技師として奈良県へ赴任していたが、この間、連日のように奈良県内の現場へ出かけている様子が日記からみてとれるから、日常の仕

事の中で蒐集する機会を得ていたことはまず疑いなかろう。また、関野博士は東大着任後も文化財修理現場に関わり続け、逝去した時点（昭和十年七月）で国宝指定を受けていた建造物約一五七〇棟と、修理完了あるいは修理中のもの約六〇〇棟のうちの大部分に関係した<sup>5)</sup>というから、現地視察のときに入手した古瓦も少なくないと思われる。

ところで、取得した瓦の所有権はどのようになっていたのだろうか。寺地内に打ち捨てられているものについては自由に持ち帰れたことが容易に想像できるが、関野日本瓦コレクションのなかには瓦に直接「廟務所井戸掘之際六尺余土中ヨリ発掘ス明治三十年三月十二日」と記録された豊国神社の軒丸瓦など、発掘現場から得たものも含まれている。そもそも「誰が」発掘したのかまでは記載されていないため、関野博士自身の発掘によるものか、発掘した人物あるいはその寺院から譲り受けたものか、断定できない。しかしながら、「古瓦模様沿革考」あるいは「考古学講座 瓦」に紹介された瓦についてみると、発掘して出土したものについては、基本的に当該土地の保有者の所蔵に帰していることがわかるため、一応当時においても出土した瓦の所有権は土地保有者にあり、関野博士はその一部を譲り受けていたと考えるのが妥当なようである。

②の確認できた五五点は、寄贈者名が瓦に記録されたもののほか、著作での紹介や、物品監守簿などから判明したものである。<sup>6)</sup>一旦、関野博士の個人蔵になつてから東大に寄贈されたものは、物品監守簿上では「関野貞寄贈」としか記録されない<sup>7)</sup>ので、判明した以外に

も人から寄贈されたものは存在すると考えられる。おそらく①の直接取得したものと合わせれば大半を占めるであろう。寄贈者のうち、とくに注目される人物を以下に挙げておく。

・天沼俊一（一八七六―一九四七）

奈良県・京都府の技師を経て、京都帝国大学で教鞭をとられた天沼氏も古瓦の蒐集を行っており、「家蔵瓦目録」（私家版、大正七年・一九一八）を著している。また、「考古学講座 瓦」にも数点が「工学博士天沼俊一氏蔵」と紹介されている。関野博士との師弟関係は学生時代からで、奈良県技師だった関野博士の实地指導の下、橋夫人厨子の実測製図を行つたことに始まる。以後、在学中に東大へ移つてきた関野博士に親しく教えを受け、学問的に強い影響を受けた。<sup>7)</sup>天沼氏は明治三十九年七月から大正七年五月まで奈良県技師を勤めたが、これらの瓦を寄贈されたのもその間の明治四十四年のことであるから、関野博士の瓦蒐集開始時と同様、日常の仕事の中で蒐集の機会を得ていたことが推測できる。また、「民族全体あるいは人類全体の文化遺産であるべき過去の遺物等が、特定個人の所有に帰してしまつて、研究や鑑賞に支障が生ずることに強い憤りの念を抱いていた」<sup>8)</sup>天沼氏は「家蔵瓦目録」の執筆後すぐ、自ら集めた一八〇枚余りの瓦を総て京都大学へ寄附しているが、このような考え及び行動も、最も敬慕する師である関野博士譲りのものであつたことは想像に難くない。東大への寄贈は物品監守簿によれば二四個となつているが、今回の調査ではそのうちの二一一個が確認できた。関野博士から要請があつたとも考えられるが、むしろ自身のコレクション

ヨンを総て東大に寄贈した関野博士に感化され、寄贈に至ったと考  
える方が自然だろう。これらの大半は、不退寺、般若寺、興福寺な  
どをはじめとする寺院の、南都復興期にあたる鎌倉時代の瓦が占め  
ている。このうち(図一)に示したものは、「薬師寺東院弘安辛巳」<sup>9)</sup>  
(薬師寺東院堂、一二八一年)と瓦当面に刻まれた文字瓦で、年号まで  
明らかな点で貴重である。



図1 薬師寺東院堂 軒平瓦

・塚本慶尚(生没年不詳)

塚本氏は実に八八個もの古瓦を寄贈されたことが物品監守簿から  
確認できるのだが、残念ながら現在、それらがコレクションのなか  
のどれに該当するのかは判別できない。瓦に直接塚本氏の名が記さ  
れていないのは、おそらく点数が非常に多いので、箱ごとひとまと  
めに扱われ、個々にはラベルが貼られなかったためだろう。この人  
物については、工部大学校造家学科第一回卒業生の曾欄達蔵が「同  
氏は當初縣の土木方面の技師であったが、君の指揮の下に社寺建築  
工事に関係することとなり、其れより日本の古建築に興味を生じ、

之に伴って古絵画、古彫刻に及び、其の知識は漸次進んで今は一廉  
の君の助手であると、蓋し塚本君は君の感化を受けたこと殊に大  
なる人であったのである。」と書き残している。<sup>10)</sup> 関野博士は知人たち  
の案内をして奈良の古社寺を回ることがしばしばあったようで、時  
間がとれないときには塚本氏を代役にしていたそうである。曾欄氏  
もその関係で塚本氏の世話になったと記している。関野博士は明治  
三十四年に東大へ赴任する際に塚本氏も東京(文部省)へ連れていっ  
たほどだから、おそらく塚本氏は関野博士に感化されて瓦の蒐集に  
取り組んだのだろう。東大への寄贈に至った経緯は不明だが、関野  
博士との個人的な強いつながりが背景になっていることは疑う余地  
がない。

・棚田嘉十郎(一八六〇〜一九二二)

棚田氏は、木挽職人から転職して植木商を営んでいたが、明治三  
十二年十一月に関野博士から平城宮址に関する研究を聞き、朝堂院  
の遺跡がむなしく農夫の糞尿の堆積所となっているのを嘆いて、平  
城宮址の保存運動に一生を捧げた人物である。その活動は、天皇主  
義と郷土への愛着とに根ざしていたと言われる。<sup>11)</sup> 詳しいことは不明  
だが、平城宮址の保存運動を通じて関野博士とつながりを持ったこ  
とは明らかである。物品監守簿によれば、棚田氏から寄贈された瓦  
は八点あり、いずれも平城宮大極殿のものであるが、今回確認でき  
たのは一点のみである。

・八木英三郎(一八六六〜一九四二)

八木氏は関野博士とほぼ同時に本格的な古瓦の研究に取り組んだ

人物で、「古瓦模様沿革考」とほぼ同時に「考古便覧」（嵩山房、一九〇二年）を著して古瓦の概説を行った。八木氏の寄贈は一点だけであるが、この瓦が関野日本瓦コレクションに含まれている事実から、個人的な交流の存在が推測できる。物品監守簿に寄贈の記載がないところを見ると、関野博士が東大に寄贈し始める明治三十八年十月以前に、既に関野博士の手に渡っていたようである。八木氏からの寄贈品は「常陸国稻敷郡君賀村発見」と記録されており、下君山廃寺のものと考えられる。「常陸国風土記」逸文によると、このあたりは白雉四年（六五三）に筑波・茨城両郡の七〇〇戸を分けて建郡といい、同所に郡衙が置かれていた。<sup>18</sup>この瓦は七世紀に属すると思われる三重弧文の軒平瓦片であるから、郡衙が存在した当時のものとしてよいだろう（図二）。



図2 下君山廃寺 軒平瓦

このほかにも、「考古学講座 瓦」において水口町萬屋旅館蔵と紹介されている紫香楽宮の軒丸瓦も関野日本瓦コレクション中に確認できるので、後から関野博士に贈られたことが推察でき、また、七世紀に属すると思われる園城寺の軒丸瓦も三点、同寺より寄贈さ

れている。さらに東大寺大仏殿の鎌倉再建時の瓦も五点、同寺より寄贈されている。このように、古瓦研究の第一人者であった関野博士の下へ、少しずつ瓦が寄贈されてきた様子が窺える。概して寄贈品は状態が良く、かつ貴重なものが多いようである。

③について確認できた一九点のうち七点は、もともと橋本という人物が所蔵していたものである。関野博士は「遼東の豕（四）」（注六参照）のなかで、「其頃余は奈良の橋本某氏が維新前に蒐集せられた多くの古瓦を買ったが、（後略）」と述べており、購入したことがわかる。この橋本という人物に関しては、「古瓦模様沿革考」のなかに「此瓦は嘉永頃奈良の愛瓦家橋本氏の蒐集の一にして、出処信ずべきが如し」という記述があるから、奈良在住の好事家に類する人物だと考えられ、また嘉永年間（一八四八〜一八五三）から瓦の蒐集をしていたとなれば、関野博士よりも相当年長であったと推定される。瓦に直接橋本氏の名が記されたものがないのは、まだ蒐集を始めたばかりで情報を記録するルールをきちんと決めていなかったからではなからうか。物品監守簿上、古瓦の東大への寄贈は、明治三十八年十月の関野博士からの一九二個を最初としているが、この一九二個は元々関野博士の個人蔵だったことから、はじめから東大で管理していたものほど出処その他の情報管理が徹底していないようである。今回橋本氏から買い入れたことが確認できたのは七個だが、他にも多くの摺本などを橋本氏から入手していたことが「古瓦模様沿革考」により確認できる。しかしながら、苗字だけで名前が明らかでないところからみて、二人の間に親交があったとは考えら

れない。奈良県技師の頃、一、二度会っただけの間柄か、または第三者を介して入手したのではなからうか。とはいえ、「出処信ずべきが如し」と信頼感をもっているところをみると、橋本氏は研究者に近い人物だったと考えられよう。この買入れ入れた七つの中には、久米寺、大官大寺、巨勢寺などの、いずれも七世紀に属する貴重かつ有名なものが含まれている(図三)。



図3-1 久米寺 軒平瓦  
図3-2 巨勢寺 軒平瓦

残る二二点は、「松山買入」と瓦に記録されているものである。ここで、「松山」とは道具屋の名前と考えられる。なぜなら、関野博士はこのうちの平安京内出土の鬼瓦について『考古学講座 瓦』のなかで紹介しており、「余が東大工学部のため京都にて得し鬼瓦の残欠」と述べているからである。前述の橋本氏に関しては、瓦を紹介するときに元橋本氏の所蔵品であった旨を必ず記しているのに対して、「松山」の名は著作には書かれていない。また、物品監守簿には、寄贈者としてではなく、納人として記録されている。したがって、「松山」なる人物は古瓦の蒐集家ではなく、おそらくは商売

として古瓦を扱う道具屋であろうと推測でき、当時古瓦が商品として流通していた様子が窺われる。また、さらに関野博士はこの鬼瓦について「余が同時に購ひ得し他の巴瓦唐草瓦は多く平安宮に属しているから此の鬼瓦も恐らくは平安宮址出土のものであろう。」と付け加えているのだが、物品監守簿では一度に全部で一八点を購入したことになるので、残る二二点も同時に購入したことがわかる。

ところで、関野日本瓦コレクションにおいては、この二二点以外に道具屋系の瓦を購入した形跡は見あたらない。一つには、商品として流通する(すなわち、好事家に好まれる)古瓦は、必ずしも関野博士にとって、学術的に価値のあるものとは限らなかったことが考えられよう。関野博士は「古瓦模様沿革考」の冒頭で「藤貞幹の好古瓦譜、収むる所数十百に上れども、概ね諸殿院諸官衙の銘字ある平瓦の類に過ぎず。以て一部好事家の渴を医すべしと雖も、以て技術の変遷を知るの資料と為すに足らず。」と述べている。この言葉から、それまでの好事家たちの視線が平安末から鎌倉時代以降の文字瓦に向いていた様子が窺える。しかしながら、関野博士の古瓦研究は飛鳥・奈良時代を中心とするものであったし、「結び」で詳しく述べるとおり強い下降史観を形成していたから、当時の古瓦の商品流通は関野博士の要求に応えるようなものではなかったのではなからうか。あるいはまた、発掘現場や出土した寺院から直接譲り受けるのと違い、第三者である道具屋のような人物を介すると瓦の出所の信頼性がゆらぐため、研究資料の蒐集方法としてはあまり好ましくな

かったという事情の方が大きかったかもしれない。

### 三 蒐集の背景

#### 古瓦研究への意気込み

古瓦研究に取り組むにあたっての関野博士の問題意識が、「古瓦模様沿革考」の冒頭に記されているので、ここに引用する。

古瓦は、従来好事家が無意味に蒐集し、無意味に珍藏せるの外、未だ之を科学的に研究せる者ありしを聞かざるなり。藤貞幹の好古瓦譜、収むる所数十百に上れども、概ね諸殿院諸官衙の銘字ある平瓦の類に過ぎず。以て一部好事家の渴を医すべしと雖も、以て技術の変遷を知るの資料と為すに足らず。然れども、建築物の一部を構成して屋蓋の装飾をなし、その形状及模様が当時技術家の意匠を表白し、以てその沿革消長を知らしむるの参考に供すべきものなりとせば、吾人建築家たるもの、須らく古瓦模様の研究に勉めざるべからず。是れ、少なくとも、他日日本建築史を完成するの<sup>16)</sup>上に於て、欠くべからざるの資料なればなり。

この文章は、二つの指摘から成ると言えよう。一つは、瓦も建築を構成する部材の一つであるから、その変遷も建築史を語る上で欠かせないという考え方である。当たり前のことを言っているにすぎないのだが、今日では建築史から切り離されて考古学の独壇場となっている分野だけに、現代の我々に対しても意味深い指摘に思える。もう一つは、藤貞幹に代表されるそれまでの古瓦研究が好事家の趣

味的な域を出ないものだったことへの批判である。ここに研究者としての強い自負心と、開拓者としての意気込みを感じる。全く何もないところから手探りで始めるには相応の紆余曲折があり、忍耐力も要したことと思うが、それを支えたのがここに見られる使命感であつたろう。

#### 技師としての仕事と瓦

ところが、こうした内なる問題意識が存在する一方で、実は関野博士を古瓦研究へと駆り立てるもつと現実的な問題が存在したらしい。それは職務上、修理現場において、瓦の製作についても技術指導・監督をする立場にあつたことである。「卅路之志保里」では、明治卅年九月の記事に、

七日 晴 暑稍甚

家居 水彩画ヲ写シ又新葉師寺瓦(唐草)大サヲ定ム

九日 晴

家居 新葉師寺唐艸瓦模様ヲ定ム

と記されており、実際に瓦当文様の決定まで行う立場にあることがわかる。また、明治卅一年八月には、

廿一日 晴 日曜

(前略) 午後法起寺ニ至リ鬼瓦製作拙ナルヲ以テ請負者ニ悉改作センコトヲ命シ懇々指示スル所アリ

と、請負業者にかなり厳しい注文をつけていることもわかる。忠実に古瓦を模すことに意を注ぎ、手抜きを許さぬ姿勢が窺える。



これに関連して注目されるのは、関野日本瓦コレクションには一点だけ「模型」と記入された新薬師寺本堂の鬼瓦が存在することである(図四)。非常によくできているので、一見して天平時代のもとの区別がつかない。どのような目的でこの模型が製作されたのかは明らかでないが、次の二つの可能性が考えられよう。

①新薬師寺の解体修理に先立ち、古瓦をもとに作られた見本品。

②新薬師寺の解体修理に際し、古瓦をもとに作られたもので、(保険をかける意味で)余分に作成されたもの。

断言はできないが、②の場合「模型」という言葉を用いることは考えづらいから、おそらくは①ではないかと想像する。すなわち、本来の屋根葺工用とは別に製作されたものと考えられる。前掲の日記にみるとおり、出来が悪いとやり直しを命じているくらいだから、事前にサンプルを作らせるのはむしろ当然のことだったろう。

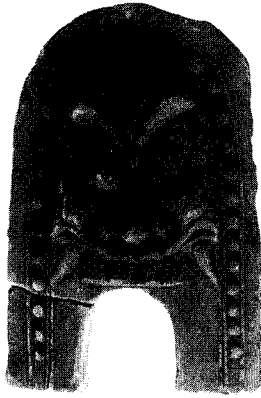


図4 新薬師寺(模型) 鬼瓦

いずれにしても、修理現場での監督の仕事は東大着任後も引き続き行ったから、関野博士にとって瓦当文様の研究は現場での復元作業に欠かせない、より実際的な意味をもつテーマでありつづけたと

考えられよう。

#### 教育活動の一環としての蒐集

古瓦研究を行うことについての意義は今述べたとおりだが、古瓦の蒐集自体には自己の研究だけでなく、別の目的も存在したことを忘れてはならない。前節中、「瓦の入手経路のところ」で既にふれたが、松山という道具屋らしき人物から購入した瓦に対して「余が東大工学部のため京都にて得し鬼瓦の残欠」と述べているところから考えて、<sup>17)</sup>ここでは教育目的あるいは学術参考資料として購入したと考えられる。同様の表現は同じ「考古学講座 瓦」のなかに数カ所見られ、とくに朝鮮半島での古瓦蒐集については「余の東京帝大や朝鮮総督府博物館のため蒐集せし瓦当及び拓本は数百種に上っている」と述べているので、必ずしも自らの研究のためだけに蒐集していたのではなかったようである。また履歴を調べてみると、<sup>18)</sup>大正三年十二月、大正六年二月、八月の三度にわたり、東京帝国大学工科大学術参考用として朝鮮金石拓本二九枚、埴四五、劉仁願記功碑拓本などを寄附し、その都度賞として木杯を下賜されていることがわかる。こうした事実から、日本の古瓦についても学術参考用として寄附するために蒐集した側面があると類推できる。おそらく、最初の寄附を行った明治三十八年以降は、公的な学術史料とするために蒐集していたと考えて良いだろう。

### 研究の端緒

直接的に瓦研究を開始する端緒となったのは、明治三十年十一月一日のある古瓦の発見であった。「卅路之志保里」には次のように記されている。

一日 晴

(前略) 夕刻森岡君興福寺境内ヨリ古瓦唐艸及巴各一片ヲ拾ヒ来ル熟視スレハ巴ハ前年余カ鳳凰堂修繕設計ノ際木屋内ヨリ獲タル者ト全ク同一ニシテ唐艸ハ平等院ニ宝物トシテ蔵スル者ト更ニ異ナラス因リテ興福寺古瓦ト鳳凰堂ノ者關係アルコトヲ知り併セテ右ハ藤原時代ノ者ナルコトヲ発見セリ即鳳凰堂ノ建立永承七年ニシテ興福寺金堂講堂其他ノ再建ハ永承三年ニ當リ兩寺製瓦ノ為メ非常ニ尽力シタルノ記録アレハ鳳凰堂及ヒ興福寺瓦ハ同一製造所ノ窯中ヨリ出タルモノナラン余去三月以来古瓦ノ年代ニ付キ研究ヲ費シタルニ今偶然其ノ端緒ヲ得タルヲ喜ブ

ここで「非常ニ尽力シタル」とは、藤原頼通のことを指しており、関白で氏長者であった立場から兩寺の建設に意を注いだことを言っている。兩寺の瓦の一致については『考古学講座 瓦』<sup>19)</sup>にも触れられており、写真で紹介されているため、このとき見つかった興福寺の瓦がコレクション内に存在することがわかった(図五)。



【図5】興福寺 軒九瓦・軒平瓦

明治二十九年三月から古瓦の年代について研究を始めたところが、おそらくこの発見のときまで年代の明らかなものがほとんど見つかっていなかったのだろう。年代の確定できるものが現れたことは大きな収穫だったに違いなく、この発見がその後の蒐集活動に弾みをつけたであろうことは想像に難くない。しかし、これは平安後期の永承年間の瓦であるから、奈良時代以前の瓦編年にはあまり役に立たなかったと思われる。したがって、この時点ではあくまでも地道な比較検討作業への遠い入口を見つけたに過ぎなかったと考えられるのである。

#### 四 蒐集の多様性

ここでは関野日本瓦コレクションの多様性に注目し、個々のコレクションと関野博士とのつながりを考えてみることにする。

## 法隆寺論争と古瓦

関野博士が明治三十八年に始まる法隆寺論争において、非再建論を主張して喜田貞吉と激しく論戦したことは有名であるが、その際非再建論の有力な証拠の一つとして提示されたのが西院瓦の年代観であった。関野博士は金堂内の薬師如来像及び釈迦如来像などとの比較の上で、金堂屋根裏から発見された瓦を飛鳥時代のものと判定し、その瓦が屋根裏から発見されたことをもって現在の金堂が飛鳥時代の建立以来焼失していないことを主張したのである。ところが、この瓦については古瓦編年の研究の進展に伴い評価が変わり、後に四天王寺式の素弁蓮華文に後統する形式であって推古朝まではともも遡れないことが指摘されている。<sup>20</sup>しかしながら、西院瓦の形式を日本書紀に火災の記事がある天智九年（六七二）以降に位置づけることには学者の間で依然として抵抗がある。なぜなら、東院で出土した同型式の均整忍冬唐草文軒平瓦が皇極二年（六四三）の斑鳩宮炎上以前のものであるとするならば、<sup>21</sup>西院瓦の天智九年まで時間が空きすぎると考えられるからである。<sup>21</sup>したがって、瓦の編年の上からは依然天智九年の焼失を疑う立場も存在し、<sup>22</sup>西院瓦の年代には未だに明確な解答が出ていない。こうした論争の行方を昭和十年に逝去してしまった関野博士が知る由もないのだが、『考古学講座 瓦』を著した昭和三年の時点では、西院瓦を未だ飛鳥様式と考えていた。そのため西院瓦（完品の均整忍冬軒平瓦、法隆寺蔵）の紹介で次のように述べている。

此の唐草瓦が金堂の屋根裏より発見せられたるはその一たび金

堂の屋上に在りしことを示し、而も飛鳥時代此の種最古の様式を有せるものとせば創立當時のものたることは明白にして、今の金堂が創立以来一回も火災に罹ったことの無い最も確実なる證據である。法隆寺再建非再建問題も此の一片の瓦當のみにて解決することができると思ふ。<sup>23</sup>

ここに、古瓦文様の年代観に関する揺るぎない自信が見え隠れしているのは、誰の目にも明らかだろう。実はこの前年あたりから関野博士は二寺並存説を唱えはじめ、天智九年に焼けたのがもう一つの若草伽藍の方だったとしているのだが、<sup>24</sup>今日の目には、この説に到達したのも西院瓦の年代観を絶対視していたことが一因となっていたと考えられる。

この瓦と一緒に、全く同手法のものとして紹介されている瓦が、幸運にも現在コレクション中に存在する（図六）。やや欠けているものの、かなり状態は良い。まさにこの瓦は、西院伽藍創建の鍵を握るだけでなく、大論争に火をつけた歴史も積み重ねて存在しており、今もなお、未解決の問題を我々に提示し続けていると言えるだろう。



【図6】法隆寺 軒平瓦

## 山田寺出土の垂木先瓦

関野日本瓦コレクションのなかで特に珍しいものの一つに、山田寺出土の垂木先瓦がある。これは軒丸瓦の瓦当の外区部分を除き、中央に垂木に止める釘穴をあけた形式で、七世紀中葉のものである(図七)。この瓦は「古瓦模様沿革考」と「考古学講座 瓦」の両方に紹介されているのだが、両者の執筆の間に認識の変化が読みとれて面白い。「古瓦模様沿革考」(明治三十五年、一九〇二)では以下のように紹介している。

此の巴瓦には圖の如く周縁なく花瓣の輪廓にて終れるが如く見ゆるは珍奇の手法にして、後方の丸瓦との連絡は如何にせしか疑はし。<sup>26)</sup>

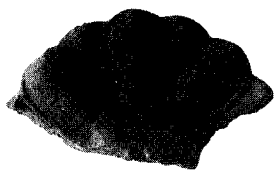


図7 山田寺 垂木先瓦

この段階では、まだ垂木先瓦であることに気づいていなかったようである。一方、「考古学講座 瓦」(昭和三年、一九二八)の方では以下のように解説している。

……(前略)……思ふにこれ或は圓垂木の端に裝飾として釘著せられしものにてはなきか。前漢書司馬相如傳に華棧壁璫

の説あり、師古の註に「壁璫以玉為椽頭當」といひ、斑固の西都賦に「裁金壁以飾璫」などと載せてあるが如く、漢時贅澤な建築には壁璫即ち玉を刻んで垂木の端を飾つたのである。其の壁を用ふること能はざるものは或は之に代ふるに文様を彫刻せる瓦當を以てしたのであらう。楽浪出土のものは即ち是にして此の風後世までも行はれ百濟新羅は勿論我が寧楽時代まで波及したのであらう。<sup>26)</sup>

ここでは明らかに、以前よりも進んだ知見が示されている。垂木先瓦と認定しただけでなく、その日本への伝播の過程までも視野に入れていることが注目される。詳しくは後述するが、関野博士は明治末期から度々朝鮮半島へ赴いて古建築の調査を行っていたので、これを機に垂木先瓦についても認識を深めたとみて良いだろう。朝鮮の建築を通して、日本の建築への理解を深めるといふ構図は、いかにも朝鮮建築史の生みの親として知られる関野博士らしくて興味深い。

## 東大寺大仏殿の鎌倉時代再建瓦

関野博士は「遼東の豕(四)」<sup>27)</sup>の「鎌倉再興東大寺大佛殿の瓦」と題した文章中で、大正十一年八月に岡山県の萬富瓦窯を視察したとなどについて触れている。このなかで紹介されている東大所蔵の瓦は、橋本氏から買い取った軒丸瓦一点及び駒場の旧東大農学部(現東大教養学部)に捨てられていた軒丸瓦一点だけで、ともに状態は悪く、とくに前者は小片にすぎない。ところが、今回整理したと

ころによると、関野日本瓦コレクションには別に鎌倉再建時の瓦が  
 五点まとまって存在し、紹介されたものよりも状態が良い瓦が含ま  
 れることが判明した(図八)。物品監守簿によれば、これらは昭和  
 五年四月に東大寺から寄贈されたものであるから、瓦窯から見つか  
 ったものではない。東大寺において何時ごろからどのように保管さ  
 れていたのかは不明だが、状態が比較的良好で焼けた形跡も見られ  
 ないことを勘案すると、葺き替え用としてストックされていたもの  
 か、一時期大仏殿の屋根にあったのを永祿十年(一五六七)に松永  
 久秀に焼き払われる以前に葺き替えて降ろしていたものであろう。  
 ともあれ、これらが寄贈された背景には、寺院関係者たちとの幅広  
 い交流が存在したと考えるよさそうである。

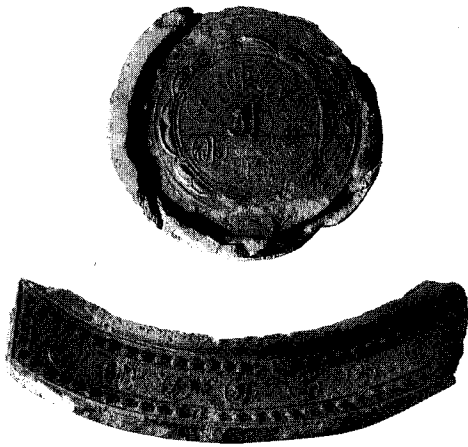


図8 東大寺大仏殿 軒丸瓦・軒平瓦

### 城郭の瓦

入手に至った経緯は明らかではないが、関野日本瓦コレクション  
 には姫路城の瓦と考えられるものが一六点も存在する。物品監守簿  
 によれば、このうちの一点は白茅会の一員だった田村鎮から大正  
 四年に寄贈されたものとわかる。白茅会は大正五年に柳田国男・石  
 黒忠篤・内田魯庵・大熊喜邦・今和次郎・木子幸三郎・佐藤功一・  
 田村鎮の面々で結成され、最初の民家研究の集まりとして知られる。  
 だが残念なことに、田村氏と姫路城、或いは田村氏と関野博士の関  
 わりはよくわからない。しかしながら、寄贈の経緯は恐らく同業者  
 的なつながりにあるとみて良いだろう。

これらの瓦は歴代城主の家紋を瓦当文様に採用したもので、一番  
 古い秀吉の時代の桐紋をはじめ(関野博士は弟秀長が城主のときと考  
 えている)<sup>28)</sup>、揚羽蝶(池田氏)、源氏車(榊原氏)、剣酢漿(松平氏)、三  
 葉立葵(本多氏)などが含まれている(図九)。いずれも瓦当部分が  
 傾斜した、朝鮮式の瓦が採用されており、これらの多くは「考古学  
 講座 瓦」に紹介されている。

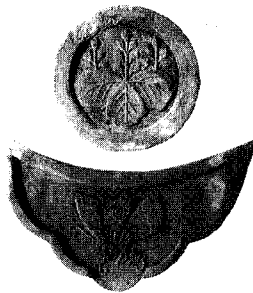


図9-1 姫路城 軒丸瓦  
 図9-2 姫路城 軒平瓦

また、伏見城の瓦も関野日本瓦コレクションのなかに四点確認できた。これらは物品監守簿によると、京都府伏見区在住の宮田三郎なる人物から昭和十一年二月（関野博士の死後約半年後）に寄贈されたものだが、これもいかなる人物であるか不明である。寄贈の経緯もよくわからないが、「考古学講座 瓦」に同様の瓦を紹介していることと何か関係があるかもしれない。これらのうち一点は軒丸瓦の瓦当面の一部と認められ、菊花文に金箔が施されていたことが確認できる点、注目される（図一〇）。



図10 伏見城 軒丸瓦

### 洋風瓦

コレクションの整理の際にやや意外に感じたのは、明治時代に焼かれた洋風の瓦が一二点あったことである。このうち六点が軍人で西郷隆盛の従兄弟として知られる大山巖公爵（一八四二―一九一六）の邸宅のもので、二点が虎ノ門にあった工部大学校のもの、残る四点は不明である（図一一）。

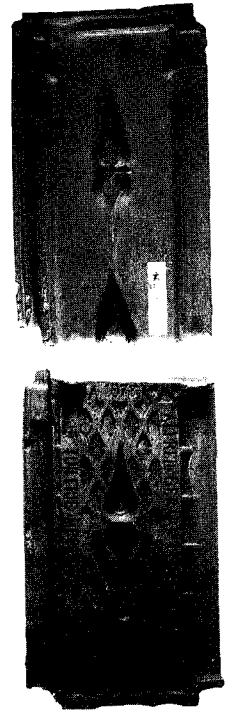


図11-1 大山公爵邸 表・裏

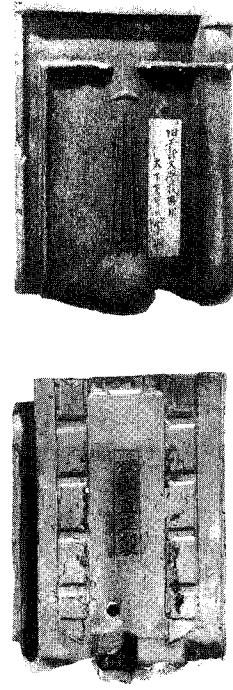


図11-2 工部大学校 表・裏

大山公爵邸の四点と出処不明の四点は、初めて日本で洋風瓦を焼いたフランス人ジェラルドによるもので、裏面に工場名や型作成の年代が刻まれている。この他に、工部大学校の一点に「植松直正製」、大山公爵邸の二点に「鈴木十兵衛製造」と刻まれたものが存在するが、このうち植松直正は初めて洋風瓦を製造した日本人として知られ、明治十年の内国勸業博覧会にも出品した記録が残っている。これらの瓦については、関野博士はどこにも発表していない。おそらく同時代的なものについてまで解説する必要がなかったためだろうが、現代から見れば日本で焼かれた初期の洋風瓦として、歴史的に価値があることは言うまでもない。これらがコレクションに加わっ

た時期はよくわからないが、虎ノ門の工部大学校が関東大震災で取り壊された、大正十二年あたりのことと考えて良いのではなからうか。古代の寺院や官衙に限らず、実に様々なものに目を向けていた関野博士の博覧ぶりを窺わせるコレクションである。

## 朝鮮・中国の瓦

最後に今回の調査対象外ではあるが、朝鮮・中国の瓦類も多数集められているので少々ふれておく。<sup>31</sup>

関野博士は特に朝鮮半島の文化財を精力的に調査し、多くの業績を残した。朝鮮の文化財を本格的に研究することとなった背景について、小川敬吉氏が追悼文のなかで次のように記している。

日露戦争も終り朝鮮に統監府が置かれ、韓国政府の改革が行われた際、諸官衙学校等に充當する為、在來の大建築物の改築及破壊が餘儀なくされた。不知不識の間に尊重すべき古建築の滅却を恐れた度支部は工事顧問たりし妻木頼黄博士の意見により関野博士に韓国古建築の調査を委嘱したのである。これが明治四十二年八月の事である。<sup>32</sup>

こうした経緯で朝鮮へ赴いたわけだが、当然このときの成果は瓦の分野にも及び、「朝鮮の瓦模様」と題して『建築世界』に大正十一年三月から九回にわたり連載されている。また、中国の瓦も同様に「支那の瓦當文様」と題して『建築世界』に大正十五年八月から八回にわたって連載されている。<sup>33</sup> これらの研究のベースとなったのが、

自身で蒐集して回った瓦であったことは言うまでもない。物品監守簿によれば、朝鮮・中国の瓦は三六一点に上るが、この他に朝鮮総督府博物館に納めたものもあつたことを考えれば、その蒐集規模の龐大さは驚嘆に値する。並外れた探求心が、博覧で知られる関野博士を根底から支えていたことを感じずにはいられない。関野博士に白羽の矢を立てた妻木氏の見解は、まさに的を得たものだったと言えよう。

## 五 結び

### 下降史観の形成について

ところで、関野博士が、東大着任後間もなく著した「古瓦模様沿革考」には、早くも今日でいうところの「下降史観」が見られて面白い。少々引用すると、

瓦を以て屋を葺くことは、我国に於ては、仏教傳來の後にして、爾後今日に至るまで、各種の建築に用いられたりしも、茲には此等総ての時代に於ける瓦の模様の沿革を論述せんとするにはあらず。其の記載を、当初より鎌倉時代までに止め、それ以後は之を省略せんと欲するなり。蓋し瓦の模様は、推古寧樂時代最も雄健秀美にして、平安時代は漸く粗拙となり、鎌倉時代の初期は稍可なれども、後期以後は観るに足るべき者殆ど稀なり。故に今は其の研究を鎌倉時代以前に止め、以後は他日の機会を待たんと欲するなり。<sup>34</sup>

古瓦研究の専門家でない筆者にこう言い切れるか少々不安ではある

が、一般的に古瓦の研究者の間では、天平期以降は粗製濫造の世界に入っていくという「下降史観」が強いと思われる。それはデザイン的な問題のみでなく、焼成の度合いなど、もつと化学的な見地からも指摘されていることである。しかし、このようなものの見方は、関野博士に関して言えば様式史の立場からの一面的な見解であり、いきおい奈良時代より後の時代の軽視につながる可能性を含むだけに、危険視されるべきものであろう。ことに日本建築史を専攻する筆者としては、過去に（最近はそうでもないと思うが）中世以前に比して近世社寺の建築に対する研究が軽視されていた事実を連想してしまい、やや抵抗を感じる。

しかしながら、こうした史観が瓦の歴史において関野博士まで遡れるという事実はまことに興味深い。なぜなら、このことは裏を返せば下降史観を形成できるだけの体系化を関野博士が成し遂げており、その評価が今日に至るまで引き継がれてきていることを意味するからである。今日的な目で見れば、強烈な下降史観の提示のなかに関野博士の研究の限界を見ることが可能であらうが、むしろ初めて古瓦の科学的研究に着手した人物が、ここまでの体系化を成し遂げた驚異の事実こそを評価すべきと考える。これを超え、様々な角度から新たな史観を提示していくことが、今後の研究者の大きな課題であらう。

### 関野日本瓦コレクションの意義

関野日本瓦コレクションの重要性は、個々の古瓦が貴重であるこ

とにとどまらない。ここではその重要性を二点指摘しておきたい。まず第一は、関野博士の人物像が投影されていることである。これまで見てきたように、瓦の寄贈関係などから関野博士の人脈を垣間見ることができた。特に塚本慶尚氏や天沼俊一氏への多大な影響が窺われたことは、弟子や部下たちから慕われた関野博士の人間性を裏づけるものであった。また一方で、個々の瓦と研究・仕事の内容との関連も見られ、法隆寺論争をはじめとする関野博士の活躍の背景を窺うことができた。すなわち、関野日本瓦コレクションは関野博士の人物像に迫る格好の材料だと言えるだろう。

第二は、我が国の古瓦研究が始まったころの状況を証言してくれる点である。これまでに見たように、古瓦研究は古建築や仏像などの調査・修理や発掘調査などと密接に関わっており、これらを主導した関野博士だからこそ、なした仕事であったと考えられる。関野日本瓦コレクションの瓦は、「研究の端緒」の項で述べた興福寺の瓦をはじめとして、著作中に数々のエピソードが記されたものが多く含まれるので、関野博士の仕事内容や研究の進行状況を裏付けるものとなっており、関野博士をとりまく社会を色濃く反映している。もつとと言うと、明治から昭和にかけて、関野博士が建築史・美術史・考古学の各分野を代表する一大権威であったことを考慮するならば、関野博士をとりまく社会とは、これらの学問分野が置かれた社会的状況と置き換えて考えられよう。すなわち、このコレクションが映し出すものも、関野博士の個人的な世界であると同時に前記の学問分野の姿でもあるのである。一人の偉大な研究者が建築



史・美術史・考古学の各分野を切り開いた時代が存在したことの一証人たるところに、関野日本瓦コレクションの価値を位置づけられるだろう。

### 注

- (1) この論文は関野博士の逝去後、「日本古瓦文様史」と改題して関野貞「日本の建築と藝術 上巻」(岩波書店、昭和十五年)に再録されている。なお、「考古学講座 瓦」は手近で入手できなかったため、以下でページ数を示す必要がある場合は「日本古瓦文様史」の頁を示すこととする。ご了承願いたい。
- (2) 東大所蔵の関野博士の蒐集による瓦は、このほかにも中国・朝鮮半島の瓦が多数存在し、現在総合研究博物館に収められている。
- (3) 関野日本瓦コレクションのうち、著作の中で写真又は摺本とともに紹介された数は、「古瓦模様沿革考」に二一点、「考古学講座 瓦」に九五点、「遼東の冢(四)」(6)参照)に二点、重複分を除いて合計一〇六点到り、今回調査したコレクションの四分の一を越える。
- (4) 「卅路之志保里」関野博士の明治三十年九月から明治三十一年十二月までの日記。現在複写本が東京大学建築史研究室に所蔵されている。
- (5) 西山政猪「関野博士を憶ふ」『建築雑誌』昭和十年十一月号による。本号で組まれた関野博士の追悼特集のなかの追悼文の

一つで、西山氏の肩書きは元満州国文教部総務司長となっている。

- (6) 著作とは、以下のことである。  
関野貞「古瓦模様沿革考」『考古界』第一篇第六号(明治三十四年十一月)以下六回にわたり連載。  
関野貞「考古学講座 瓦」雄山閣出版、昭和三年。  
関野貞「遼東の冢(四)」『建築雑誌』四七二号、大正十一年十一月。
- (7) 天沼香「ある「大正」の精神」吉川弘文館、昭和五十七年、四〇〜四四頁。
- (8) 天沼香前掲書、五六〜五七頁。
- (9) この瓦は(図一)にみるとおり、中央から順に左右に文字を振り分けている。
- (10) 前掲(5)の追悼特集の一つで、曾禰達蔵「故関野博士を追悼す」。追悼文なので、引用部分のなかの「君」とは関野博士を指している。
- (11) 太田博太郎「建築史の先達たち」彰国社、昭和五十八年、三四〜三八頁。鈴木良・山上豊・竹末勤・竹永三男・勝山元照「奈良県の百年」山川出版、昭和六十年、一〇八〜一一一頁。
- (12) 「茨城県の地名」平凡社、昭和五十七年。
- (13) 「古瓦模様沿革考」『考古界』第巻第七号、三八〇頁(連載第二回目)。
- (14) 再録の「日本古瓦文様史」七七四頁。

- (15) 藤貞幹(一七三二—一七七七)が安永五年(一七七六)に著した『古瓦譜』は、文字瓦中心に収録した図録となっている。
- (16) 「古瓦模様沿革考」『考古界』第壹篇第六号、三二二頁  
(連載第一回目)。
- (17) (14) 参照。
- (18) 前掲(5)の追悼特集号に掲載。
- (19) 再録の「日本古瓦文様史」『日本の建築と藝術 上巻』七七五—七七六頁。
- (20) 最も早いと思われるものは、保井芳太郎『大和上代寺院史』(大和国史会、昭和七年)である。
- (21) 森郁夫「飛鳥・奈良時代の瓦—斑鳩地方を中心として」(『日本古美術全集』二 法隆寺と斑鳩の古寺、集英社、昭和五十四年)。
- (22) 岡本東三「法隆寺天智九年焼亡をめぐって」(奈良国立文化財研究所『文化論叢』同朋舎、昭和五十八年)。
- (23) 再録の「日本古瓦文様史」『日本の建築と藝術 上巻』六二二頁。
- (24) 関野貞「日本建築史」『アルス大建築講座』アルス、昭和二年。なお、関野博士の逝去後、『日本の建築と芸術』上(岩波書店、昭和十五年)に再録されている。
- (25) 「古瓦模様沿革考」『考古界』第貳篇第六号、三一八頁  
(連載第四回目)。
- (26) 再録の「日本古瓦文様史」『日本の建築と藝術 上巻』六四六—六四八頁。
- (27) 前掲(6) 参照。
- (28) 再録の「日本古瓦文様史」『日本の建築と藝術 上巻』八〇八頁。
- (29) 不明の四点には、単に「横浜」とだけ書かれた整理札が付いており、具体的な建造物名が記されていない。あるいは横浜にあったジェラールの工房から直接取り寄せたものかもしれない。
- (30) 「内国勸業博覧會出品目録・明治十年」内国勸業博覧會事務局、一八七七年。
- (31) 前掲(2) 参照。
- (32) 前掲(5)の追悼特集の一つ。小川敬吉「故関野先生の思出」。
- (33) これらは逝去後「朝鮮の建築と藝術」(岩波書店、昭和十六年)、『支那の建築と藝術』(岩波書店、昭和十六年)のなかに再録されている。
- (34) 「古瓦文様沿革考」『考古界』第壹篇第六号、三二四頁  
(連載第一回目)。
- 〔付記〕  
本稿を作成するにあたって、太田博太郎先生から貴重な体験談を賜り、また指導教官の藤井恵介先生には、古瓦整理の作業に始まり全般にわたって御指導いただいた。ここに付記して感謝の意を表したい。
- (やまのうち まこと 東京大学大学院工学系研究科博士課程)